

目の見えない人びとに本を届ける

2006年2月、私たちボイジャーは電子書籍ビューアとして手掛けてきた「T-Time」(ティータイム)*をロービジョン対応させ、文字の拡大表示機能を充実させました。

ロービジョンとは、高齢化により視力が低下している人びとをふくんだ広い意味での視覚障碍の世界を総称してつかわれています。映像など高精細を追求する「ハイビジョン」という言葉が視覚の最先端技術としてあるならば、その対極に「ロービジョン」への対応技術もあるべきものとの認識から、私たちは電子書籍ビューアの課題としてこの問題に取り組んできたのです。

それから二年間をかけて私たちはT-Time／ドットブック(.book)の読上げ機能を充実させてまいりました。文字拡大だけにとどまらず音声の読上げをもつことにより、T-Time／ドットブック(.book)のロービジョン対応はいつそう強化されたこととなります。

3つのモードの組み合わせ例



*注：T-Time（ティータイム）について

T-Timeは専用形式ドットブック(.book)、TTZ(.ttz)形式、テキスト、HTMLを読む、電子出版用ソフトウェア。1998年6月発売、改良を重ねて現在Ver.5.5。詳細は、<http://www.voyager.co.jp/T-Time/>

■読上げの心臓部

T-Time／ドットブック(.book)の読上げ機能とはどういうものなのか？その仕組みを簡単に説明しておきます。

現在、T-Time／ドットブック(.book)は、読上げ機能をもつ二つのアプリケーションと連携で

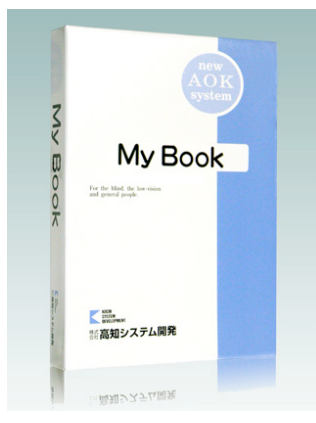
きる仕組みができあがっています。一つは株式会社アルファシステムズが開発した「電子かたりべ」プレーヤーというソフトウェアであり、もう一つは株式会社高知システム開発のPC-Talker「My Book」です。前者は、視力の低下による音読のアシストを歓迎する人たちを想定したものです。一方後者のMy Bookは、PC画面をほとんど認識できない視覚障碍の方を前提として音声による読書支援を主眼に開発されたものです。

両者とも読上げの心臓部をなすものはそれぞれのアプリケーションで、あらかじめ「電子かたりべ」プレーヤー、あるいはMy Bookがインストールされたパソコンで、電子本ドットブック(.book)をひらき、読上げの音声合成エンジンで文章を読んでいます。

「電子かたりべ」は、1年間の利用契約は 3,000 円です。いくつかの割引や無料試用サービスが用意されています。(*詳細 <http://www.e-kataribe.com/>)

「My Book」は39,900円です。PC-Talkerの装備が前提となります。PC-Talkerはスクリーンリーダー*として1998年に開発導入され、この市場でのトップシェアを占めています。その後PC-Talkerに付属するソフトとして、今回の電子書籍読上げソフトMy Bookが機能追加されました。

(*詳細 <http://www.e-kataribe.com/>)



高知システム開発の二つの製品
スクリーンリーダーの「PC-Talker」
電子書籍リーダー「My Book」

*注：スクリーンリーダー

その名の通り、画面に表示された情報を音声で読上げるソフトウェアです。視覚障碍者は健常者のように画面を見ながらマウス操作をすることは困難です。画面の読上げだけでなく、操作を読上げる性能も含めて「スクリーンリーダー」としている。

これらの読上げソフトは、電子書籍の一つのフォーマットであるドットブック (.book) を読上げるものです。My BookはT-Time／ドットブック (.book) とは別個に存在するもので、単体においても独自にテキスト、ワード文書、青空文庫のXHTML、PDFなどを機械読みします。

T-Time／ドットブック (.book) を通して読上げる場合は、誤読などが最小限になるよう、ドットブックのタグ拡張ができるようになっており、固有名詞の読み違いなどを極力防止できますし、My Bookのバージョンアップで不都合を不断に解消していく対応を組んでいます。パソコン上に読上げソフトが存在することによって、今まで健常者のみを対象としてきた電子書籍がプラスαの機能として読上げ機能を保持することになったのです。

■なぜ、いま読上げが.....?

コンピュータが文字を読むこと自体それほどめずらしいことなのか？

鉄道やバスに乗ったとき、つぎの停車駅をアナウンスするたどたどしい日本語を耳にした経験のある人は少なくないはずです。すでに生活のさまざまな局面にこうした自動音声読上げ機能は

入りこんできています。そうであればT-Time／ドットブック (.book) が音声読上げするからといってどこが特別なのか、むしろ遅きに失した感があります。現に視覚障害者の何人もが先例ある読上げソフトウェアを利用しています。なのになぜ読上げか？ここには特筆すべきいくつかのポイントがあります。

ひとつは、市販される電子書籍をそのまま読上げることができるという点です。誰かが読む必要はありません。機械が読むのですから当然人間が読むものとは品質的に比べものになりませんが、読めないことよりどれだけましか説明することもないでしょう。朗読者やスタジオでの収録作業は一切いりません。電子書籍を買う人はそれを読む目的でも、聞く目的でもいいということです。つくるのは一つの電子書籍なのに目的は少なくとも二つになります。聞くという目的はいままで紙の本がカバーし得なかったものです。

■読上げ対応は出版社のビジネス

もう一つは、市販の電子書籍の著作権保護との関係です。

コンピュータをつかって読上げるには、発声源である文字情報の存在がなければなりません。一般に本とはこの文字情報の連なりによってなされた作品=著作物です。電子書籍にとって著作物を保護するという事は非常に大事な仕事です。作品として一定の完成された形を持つ情報は、単なる文字情報の固まりとして加工・改ざんされうる状態になっていたり、あるいはその状態に戻されたりするわけにはいかないのです。

音声読上げのソフトウェアは読上げる対象が著作物なのか単なる文字情報なのか判断することはできません。ほとんどの場合、すべてをシンプルなテキスト情報として把握して、読上げ「エンジン」に渡していくというのが普通です。この方法では改ざんやデータの抜取りが可能になってしまいます。読上げのために原データを書出したり、あるいは原データをそのまま販売・配布することは著作権の保護上多くの問題をかかえていました。

ドットブック(.book)は著作物の同一性を保持し、不正なコピー防止の措置がとられています。ドットブックを閲覧させるT-Time／ドットブック (.book) が読上げの橋渡しをするならば、改ざん・抜き取り防止がなされている電子書籍を読上げていることになり、結果として著作物の保護に通じることになります。市販されている有償の電子書籍がそのまま読上げ機能を基準として備えることができるようになり、視覚障害者もまた同じ電子書籍の購入で音声読み上げを享受できることになります。つまり、出版社のビジネスの領域として想定できることになったわけです。

人の力によって読上げられる音訳は時間と費用がどうしてもかかります。このことは視覚障害者が手にできる出版点数に大きな影響を与えます。出版社が送り出すすべての電子書籍が音声読上げを基準とするならば、世の中に送りだされる電子的な出版物はそのまま視覚障害者への対応を備えたものになります。本を出版することが、特別な付加作業の必要なく当たり前のこととして視覚障害者の読書を支援することにつながるのです。

■柔軟な協力のもつ広がり

三つ目として、独自に開発されたソフトウェアが手を組むことによってまた新たな役立つ世界が広がる点です。

既に触れたように高知システム開発のMy BookとT-Time／ドットブック (.book) は、昨日までは全く別の場所で、全く別の目的で活動していたわけです。相互に話し合い、持てる力を出し合い、そこに今まで両社が培ってきた力を少し注ぐだけで新しいサービスが生まれていったのです。効率を発揮し、そこに投じられる開発時間は大きく短縮されました。

ボイジャーが独自に音声読上げを開発するならば、途方もない費用とエネルギーがかかったはずですが、短時間のあいだに視覚障害者への読上げ対応を完成させるなどということはできなかったとおもいます。

さらにつけくわえるならば、それぞれのソフトウェアは自由な立場を保持しています。My Bookは音声読上げソフトとして独立しており、T-Time／ドットブック (.book) とは関係なしに全く別のビジネスに対応することができます。My BookはT-Time／ドットブック (.book) 以外の電子書籍ビューアに対応することも可能なのです。

ドットブック (.book) はどうかといえば、もちろん読上げだけが目的ではありません。一つの基準として読上げ機能を備えているということであり、その意味ではMy Book以外の読上げソフトを包含することもできるわけです。こうした柔軟な協力の仕方がソフトウェアの排他性(あるいは独自性)を押し出すのではなく、広く競争相手も含んだ開かれた基準を示そうとしているのです。

■すべてが読上げできるのか？

本当にすべての電子書籍が読上げられるのだろうか？おそらくこんな疑問がわき上がってくるでしょう。現状、テキスト形式やHTML形式、ワード文書、PDFおよびドットブック (.book) として販売・配布する電子書籍でない限り機能しません。すべてが読上げできるのかに対する答えは、残念ながらいまは否です。さらに、ドットブック(.book)であっても読上げができない作品があります。

ドットブック形式であればすべて読上げできるように準備がなされています。しかしその出版物が読上げできるかできないか決定するのは出版する人の意思によります。出版社が読上げを拒否するならば、読上げできないドットブック (.book) がつくられます。この判断は出版社によって現状まちまちなのです。

講談社は音声読上げ機能の導入に際して、対応するドットブック(.book)をつくることを積極的に推進してきました。講談社はワイド活字版というオンデマンド印刷サービスを展開し、文庫本では読みにくくなった高齢者に対して大きな印字の本を一冊だけ印刷するという視覚障害者サービスを率先しているわけですから、電子書籍の読上げに対して理解を示すのも自然だといえるでしょう。T-Time／ドットブック (.book) の読上げ機能については、目の見えない人へ本が届けられることは喜びであり特別にももの申すなにもものない、電子書籍とはそういうものだろうとい

ます。本を買った読者のよろこびに属する本の利用の一つだというのが講談社の見解で、今後も電子書籍の機能の拡張に対しては、発展を含む本の未来形としてとらえているのです。

本を読む読者の読み方を作家も出版社も指示したり規定することはできません。こうして読んで欲しいという気持ちはあったとしても指図はできないわけです。例え電子書籍で音声読上げを拒否し、機能が働かない処置を施してみたところでその電子書籍を母親が子供に読んで聞かせることを阻止することはできません。これは電子であろうと紙であろうと同じことです。読者の手にひとたび本が渡ればそれをどう読むかは読者の自由なのです。

■拡張される本

電子書籍とは今後も機能の拡張があるものだと誰もが考えてくれるわけではありません。その場その場で機能を固定してはかり、新しく生まれる機能は別種の権利として主張する考えも厳然としてあります。その立場がビジネスを確保することと密接な関係があるということは分かります。

しかし一方でこの16年、電子書籍がたどってきた拡張の歴史を振り返ってみたいという気持ちを私たちは強くもちます。16年というのはボイジャーがたどったもので、歴史というには大げさかもしれませんが、けれどステップを踏んで進んできた電子書籍の機能の変化がここには明確に映しだされています。

最初は単に文字をパソコンの画面で見ただけのもの、単にページに割り付けただけ、目次と索引に代わる検索がついたというものからスタートしたのです。判型でさえ固定したものでした。フロッピーディスクやCDにパッケージして配布していたのです。OSの変化やハードの撤退・生産中止でせっかく作った作品が読めなくなる苦い経験もしてきました。その中から、出版という以上は「いつまでも残る」「誰もが読める」を忘れない決意で取組んできたわけです。

読上げはこうしてたどり着いてきた電子書籍の機能の一つです。これを可能にしたのは一人ではない、多くの人たちの力が合わさってできあがりました。今回の読上げの心臓部には各社の読上げエンジン開発の歴史があるわけですし、読上げを有効な機能とするためにキー操作を割り当てるインターフェースの特定は、視覚障害者の意見や考えが反映されて初めてできたのです。

一体何のためにこのような拡張を目指してきたのでしょうか。確実に人びとの役にたつからです。読上げという本の機能の拡張を待っている多くの人びとの存在がそこにあるからです。福祉やボランティアの支援に任せたり頼るだけでなく、出版人の出版行為そのものが視覚障害者の読書の機会を広げることにつながるチャンスを電子書籍を通じて示したかったからです。

■読上げ専門書店

電子書籍の音声読上げに理解を示し、角川書店、角川学芸出版、新潮社などつぎつぎ参加する出版社があらわれいます。

これらの出版社はすでに多くの電子本ドットブック(.book)を発行していますので、一挙にすべての既刊本を読上げ対応にすることは困難です。ですから原則新刊からはすべて読上げ対応と

し、既刊については順次遡及対応していくこととなります。ですから市場にはどうしても対応・非対応のドットブック (.book) が存在することになり混乱が予想されます。

そこで、ボイジャーのネット書店である『理想書店』は、読上げ専門書店として、ここで販売されるドットブック (.book) はすべて読上げ対応電子書籍とし、きたる11月22日 (土) よりリニューアルスタートすることになりました。『理想書店』は、視覚障碍者の方たちが安心して電子書籍を購入いただくバリア・フリーのサービス向上をはかってまいります。

■一人でも多くの人に本を届ける

電子的な出版行為には、内包する基準として読上げ機能が備わりました。今後は出版物の当たり前の機能として読上げはあります。これは電子的な出版に関わるみなさんに理解していただきたいことです。今まで健常者だけを対象としてきた電子書籍を目の見えない人びとへ届けることがご自身の判断でできるようになったわけです。

一人でも多くの人に本を届けるのが作家の願いでしょうし、出版の仕事だとも思います。機能を拡張させてきた電子書籍は、簡便な流通の手段を利用できます。在庫という負荷もなくなりました。紙の出版ではビジネスの相手としてみることはできなかった視覚障碍者を読上げ機能を備えることでビジネスの対象とさせました。

これは新たに生じる作業なしに達成できることなのです。目が見えない人びとへ本を届けることがご自身の判断でできるようになったわけです。できるようになってなお、できないように押しとどめることが出版人の姿だとは思いたくありません。100万人のロービジョン・視覚障碍者のためにどうか力をそそいでいただきたくおもいます。

2008.11.22 株式会社ボイジャー